

附属図書館 門 田 泰 典

大学図書館の改善、改革の問題を歴史的にみれば、戦後、新制大学発足前後から、大学図書館基準、国立大学図書館改善要項、司書職制度、大学図書館の近代化の運動、等主として法制面での運動が展開され、一定の成果を収めてきたが、今日なお、大学図書館の状態は一向に好転する様子がみられない。過去20年間に大学図書館は発展的成長を遂げたというよりも、非体系的・果積的衰退に至ったと思える現状である。

この間、図書館の使命、役割、機能、あり方等は、法制面で明文化され、外形は整えられたが、その実質化の面では、整理、サービスの両面で、質よりも量をこなす図書館活動を継続し、その実質は、空洞化し、核のない把えどころのない組織体となってきたと考える。

このような事態に至らしめた原因を図書館行政の貧困に求め、さらに、思考・行動を開始することも重要なことであるが、これと同等に重要と思われる問題についての反省が先行しなければならないと考える。

それは、現場を担当する専門的図書館員として、整理・サービス両面で、如何なる行政的・財政的条件におかれても、われわれの専門的業務の実質だけは、利用者に対して、これを一貫して、護り通せるような形での専門的業務の展開、確立に努めてきたかという問題である。

この疑問を発するとき、われわれの取りかからなければならない事柄は数多くあるように思う。その中でも特に、利用者の潜在的、顕在的要求との関係において、われわれの図書館内部の実体を、ダイナミックに、科学的に把握しこれを再構成することが最も緊急を要するものであると考える。われわれの出力する諸サービスが、どのように利用者の要求と結びついているか、その量は、その質はどうか、新たに必要なものは、また、不要な部分は何かを明確にしてゆくことが必要である。

このような手続を経て、今日の大学図書館の貧困の責任について、大学社会全体の部分と、図書館側の部分を明確にしてゆくことが正しい大学図書館の実質化、また専門的業務の実質化への道ではないかと考える。

文 学 部 山 田 忠 彦

現代のように細分化された学問に対応するために大学図書館の業務内容も複雑化し、専門化せざるを得ない。図書館職員も既存の知識だけでなく、社会変化に応じた新しい知識・教養が要求されてくる。技術的なものだけでなく図書館の真の役割は何か、館員はなにをなすべきか等々の理論的なものもぜひ各自が持ち、生かしていかなければならない。そこで館員としての研修はいつの時にも必要となってくるが、京大の現状と照らし合わせて内部研修の確立について書いてみたい。

勤務時間内に目録法とか語学の勉強をしたい、書誌学的なものを学びたい、図書館学の理論を身につけたい、図書館員のあり方について考えたい等々、すべて業務に役立てたいということを前提にして図書館員は希望を持っている。しかし京大では仕事量の増大・人員不足等が重なり、日常業務に追われ、また、職員が自主的に学習する権利が確立されていないため、館員の希望にもとづく自主的研修がかなえられているのはほんの一部分でしかない。そのため研修は時間外に館員の自己負担（経費をも含めて）で行なわれており、大学図書館としては全く消極的である。東大農学部図書館では学生の授業を館員各自でカリキュラムを組み聴講でき、また、特殊語学は特別に講習が行なわれており、他大学数校でもそれに似た